

映画「沈黙の春を生きて」

辻 宏

10月にSMILE会で講演して頂いた松本氏から招待状を頂いた。坂田雅子監督による最新作で、岩波ホールでロードショー上映された。

ベトナム戦争の際、南部の全域に亘って散布された枯葉剤の傷跡を追ってベトナムとアメリカに取材したドキュメンタリー映画である。

レイチェル・カーソン(1907-1964、海洋生物学者)は、1962年「沈黙の春(Silent Spring)」を著し、警告した。「化学物質は放射能と同じ様に不吉な物質で、世界のあり方、そして生命そのものを変えてしまいます。今のうちに化学薬品を規制しなければ、大きな災害を引き起こすことになります。」殺虫剤などの合成化学物質の無分別な大量散布(使用)が、生態系を乱し、生物環境の大規模な破壊をもたらし、人間の生命にも関わることになると警告、社会に大きなインパクトを与え、世界が環境問題に目を向けることとなり、やがて、DDTが禁止されるきっかけとなった。

1961年に始まったベトナム戦争では、ジャングルに潜むゲリラの隠れ場所をなくすため、米軍は枯葉剤を散布した。枯葉剤(Agent Orange、オレンジ剤など)は農薬と同じ成分を持つが、人体や自然環境に多大の影響を及ぼす猛毒のダイオキシンが含まれていた。当時のアメリカ政府が「人体に影響がなく、土壌も1年で回復する」と説明していた枯葉剤は、400万人ものベトナムの人々の上に直接散布され、その被害は戦後35年を経た今も続いている。当時ベトナムに駐留していた米軍兵士も枯葉剤を浴び、発癌、生殖障害、免疫障害を来して、帰還兵の多くが今なおその影響に苦しみ、更に被害は彼らの子供や孫の世代にまで及び、遺伝子に影響を及ぼし奇形や2分脊椎症等が生まれている。

かつて、ベトナムのホーチミン市にある戦争記念博物館を訪れたことがある。庭には戦車や各種の爆弾が展示され、室内には、多数のガラス容器にホルマリン漬けされた奇形の胎児、幼児が展示されてあった。R.マクナマラの反省の文章が示されてあった。「確かに我々は誤っていた、極めて重大な誤りであった。」そしてその紹介記事の中に記されてあったが、散布された枯葉剤が75トンであり、166kgのダイオキシンが含まれているとされる。

(附)・ダイオキシンの耐用1日摂取量(TDI、生涯摂取し続けても健康に害がないとする1日当たりの摂取量)を体重1kg当り4pg(ピコグラム、1兆分の1g)と規定、土壌においては、環境基準を1g当り1000pgとしている。

・SMILE会(2001・9・19)「地球環境と開発」のテーマで報告。

映画は、片足と指を欠損して生まれた、帰還兵の娘ヘザーが、父の戦場であったベトナムを訪ね、両国の被害者の交流を果たす。枯葉剤の刻印を背負ったベトナム、アメリカの双方の子供たちの困難と勇気を描き、レイチェル・カーソンの預言的言葉に再び耳を傾けることの大切さを訴えている。視力を失ったベトナムの男が一弦琴で寂しげな音調を奏でる。ヘザーの声が追いかける。音が合った、Amazing Graceの曲である。

映画が終わりに近づいて字幕が流れ、館内が点灯されても、直ぐに立ち上がる観客は居なかった。それ程にも重い内容のドキュメンタリー映画であった。

最後に、この映画の坂田監督は「放射能と化学薬品。それは、どちらも進歩という名のもとに人間が作り出してしまい、制御できなくなってしまうものだ。」と訴えている。